

巻 頭 言

教授 小林 裕明 (平成26年度入局)

碩門会誌の2020年度内発刊を目指そうと教室スタッフに伝えながら、私自身が山積する仕事に追われ大幅に発刊が遅れたこと、心よりお詫び申し上げます。現在、副院長に加え、病床稼働率などの病院運営も担当する地域医療連携センター長、遺伝カウンセリング室長、周産母子センター長、ロボット手術運用ワーキング長などの学内職務で忙しくなっているのですが、学外の学会関連では、加えてその数倍量の業務を努めなければなりません。もちろん、各種手術執刀や回診・カンファレンスは教室の財産である教室員の研鑽につながる最優先事項のため、その他の業務を理由に疎かとならないように心がけていますので、1日が48時間であっても時間が足りない現状があります。昔から睡眠を削って仕事をこなす日々で比較的平気に凌いできたのですが、さすがに還暦を過ぎるとそうもいかず、睡魔に負けて締め切りを過ぎた仕事が山積してきました。言い訳ばかりで恐縮ですが、今後はせめて碩門会誌だけは年度内に皆様にお届けできるように努めていきたいと思えます。



昨年は有馬直見碩門会会長をはじめとする同門および教室の皆様に還暦祝賀会をご企画頂き、大変有難うございました。コロナ禍の中、皆様に何かあってはいけませんのでお気持ちだけ有難くいただき、祝賀会の実施は固辞させていただきましたこと、お許し下さい。皆様から赤いちゃんこを贈りたいとお話を頂きましたが、今後やることも多く、まだまだ老け込みたくないのので“それだけは”と勘弁していただき、写真のような赤いゴルフウェアと帽子に代えさせていただきました。この場を借りてお礼申し上げますとともに、コロナが落ち着いた後の同門会ゴルフにはぜひ着用して参加したいと思います。

2020年度は何とんでも新型コロナウイルスに振り回され始めた1年でした。医師になって36年、生活様式まで一変するこのような深刻なパンデミックに遭遇するとは思いませんでした。有効なワクチンが安定普及して、通常のインフルエンザ並みの対応で済む時期が来ることを願うのみです。鹿児島県の要請に応じ、新型コロナウイルス感染症調整本部の委員と同・周産期班の班長を務めました。幸い現在まで大きな周産期関連の重症例は生じていませんが、昨年末にその当時までの経緯報告を求められた依頼稿を執筆しましたので、許可を得て本誌にも転載してもらいました。コロナによる制限を受けた生活を送っていると、人と人とのFace to Faceのコミュニケーションが職場における潤滑油として如何に重要であったかがよくわかります。2020年度入局の先生達は、九州連合学会の沖縄にも、日産婦学会の東京にも連れていくことができなかつたばかりか、教室挙げての歓迎会すらしてあげることができませんでした。今さらながら、これらの行事が教室員のまとまりや盛り上がり如何に重要だったかを再認識しています。もちろん今年の教室にまとまりがなかつたわけではありませんが、新しく仲間となった医師・助産

師・看護師らの方々と、コロナ禍前のように胸襟を開いて語り合う場があれば、もっと“阿吽の呼吸”で話が通じることは多かったはずですが。

さて、この1年間の教室の動向についてお伝えします。2020年4月から後期研修医（専攻医）7名と、それ以降のベテラン医師3名の計10名の先生方が入局してくれました。医師として産婦人科を選んでくれた7名の新入局の先生方については、碩門会で自己紹介を兼ねた発表をしてもらいましたが、コロナのためご参加できなかったOBの先生方も多かったと思います。本誌の自己紹介を通じてお見知りおきいただければ幸いです。

残る3名のベテランの新入局者のうちお二人は、2018年から県知事が“安心して産み育てられる鹿児島県”の政策テーマのもと、県内の産婦人科医を増やすため当教室に下さった“特任教員枠”の事業の中で新たにお迎えしました。一人は水野美香先生で、以前は名古屋大学産婦人科の講師、愛知がんセンターの婦人科部長も務められた婦人科腫瘍のエキスパートですが、今回縁あって本事業の特任講師としてお迎えすることができました。基礎研究で多くの論文を書き、臨床研究でも国内の多施設臨床試験の責任者を務めるなど、アクティブな活動をされてきた先生です。教室のみならず鹿児島の産婦人科医療の発展のために末永く活躍してもらえることを願っています。もう一人は東京慈恵医大から特任助教としてお迎えした黒田高史先生で、婦人科腫瘍専門医取得に向けた修練の一環として1年間の国内留学でおみえになりましたが、足りていなかった広汎子宮全摘出術の執刀手術数も数か月でクリアされ、後半は慈恵医大にロボット手術のノウハウを持ち帰るべく、術者のライセンスを取得のうえ帰学されました。数年間の期間限定事業として県から提供されているこの“特任教員ポスト”の支援事業により、人員不足が深刻であった中堅教室員数が増加し、そのおかげで鹿屋医療センター、県立大島病院、川内済生会病院、指宿医療センターなどに十分な数の教室員を派遣することが可能となりました。残る1名の入局者は2020年春に開設した寄付講座である“婦人科がん先端医療学講座”の院生として九州大学から来てくれた小林裕介院生です。病理学教室には、従来の術中迅速・術後病理診断に加えて、当教室独自の臨床試験であるセンチネルリンパ節やトラケクトミーに関する術中迅速診断および近年、共同研究として始めたがんゲノムパネル検査に関連する病理診断のご負担をおかけしています。これらに関する手術検体を運搬・処理し、正確な臨床情報を病理学教室に伝えてくれる橋渡しの大学院生を誕生させることは喫緊の課題でした。教室員不足のため、学外に院生を募って何とか九州大学から期間限定で大学院生を派遣いただけました。小林院生が戻る後も病理学教室にはシームレスに大学院生を派遣し、臨床のみならずがんゲノム診断などの基礎の面からも共同研究を続けていけたらと思います。

この婦人科がん先端医療学講座のプロジェクトの一つに、熊本大学薬学部名誉教授・前田浩先生と共同研究してきたナノメディシン技術により既存の抗がん剤を高分子化し、がん細胞特異的に作用させようというドラッグデリバリーシステムの研究がありました。そのお弟子さんで、現在、スウェーデンのカロリンスカ研究所に留学中でシニアラボマネージャーを務めているPh.D.の関孝弘先生をこの寄付講座に招聘する予定で、前回の碩門会講演会ではWebでリモート講演していただきました。その後、誠に残念なことに、2021年5月に前田先生が急逝されたことやご家族の状況の変化もあり、関先生が帰国されることがかなわなくなりました。本プロジェクトは続けてはいくつもりですが、現在の私には研究棟で大学院生に直接基礎実験を教える時間はなく、教室に最先端の基礎研究を根付かせるためにも、新たなPh.D.の指導者を探すことにし

ました。そこで、私が九州大学生体防御医学研究所細胞学部門で大学院生だった当時の准教授で、のちに信州大学医学部の分子腫瘍学講座教授・バイオメディカル研究所部門長等を歴任された谷口俊一郎名誉教授に、私の要望に合う候補者がいないか電話で相談しました。その時に、先生がベンチャー企業と開発を手掛けてこられた新規バイオ医薬品の創薬プロジェクトがコロナ禍もあって Phase I の臨床応用までで頓挫していることを知り、私自身、将来、実臨床で脚光を浴びると期待していた画期的な新薬でしたので、大変残念な思いにとらわれました。先生は非常に頭脳明晰な素晴らしい指導者で今でも衰えることのない研究意欲をお持ちの私が敬愛する研究者ですので、それなら先生ご自身に寄付講座で大学院生を指導しながらその新薬を世に出してもらえれば、患者さんのみならず教室にとっても大変ありがたいと厚かましい発想をしてしまいました。まさにその電話で「谷口先生さえよろしければ当教室の寄付講座で薬事承認まで一緒に目指しませんか」と提案したところ、まさに「瓢箪から駒」でその場でご快諾いただけました。そして、先生のご実家は熊本で奥様は福岡なのですが、長年のお住まいが信州にあるなか、2021年春から当面は単身で鹿児島に来てくださることになりました。名誉教授のご年齢にもかかわらずそこまで決断された先生の研究への飽くなき情熱に改めて敬服するとともに、私自身が師事して大変良かったと思える大学院時代を今の教室員にも体験してもらいたいと、2名の大学院生が誕生することになりました。さらに別の Ph.D. のベテラン共同研究者も加わる予定ですし、将来的にはベンチャー企業からも研究者が来る可能性がありますので、来春に向けて現在の P2 実験室に併設して P1 実験室を作り、ベーシックリサーチエリアの規模を大幅に拡張します。今後も大学院生が増えていってくれば、教室を主宰した時からの私の念願である“夜遅くまで教室員が研究棟で実験し、研究の成果と将来の展望について語り合うアカデミア”が実現すると楽しみにしています。今年の碩門会では谷口先生にも特別講演いただく予定です。将来、分野にかかわらず基礎研究に興味を持っている教室員はもちろん、OB の先生方にとっても、非常にわかりやすい楽しいサイエンスの醍醐味を、本プロジェクトの紹介とともにご堪能いただけるともいますので、奮って碩門会講演会にご参加ください。また谷口先生には少なくとも私の退任までは寄付講座の特任教授として教室を支援していただきます。同門の先生方におかれましては何卒よろしくお願いたします。

私が専門のがんの話ばかりになってしまいましたが、私自身は4つのサブスペシャリティを臨床だけでなく研究でも教室に維持・発展させることに注力しています。その一環として私自身、勉強する時間を確保することは非常に困難でしたが、若いころから慣れている“徹夜の直前詰め込み”で、女性ヘルスケアの専門医試験を無事クリアすることができました。崎濱ミカ先生も唐木田智子先生も同時に合格されましたので、当院はヘルスケア専門医の多い充実した女性医学会認定修練施設となります。すでに婦人科腫瘍学会指定修練施設、ロボット手術見学指定施設、産科婦人科内視鏡学会認定研修施設、日本生殖医学会認定研修施設などを有しており、もうしばらくして NICU で取り扱える分娩週数が28週となれば周産期・新生児医学会の認定施設も指定から基幹施設に格上げとなります。臨床の場としては他の地方大学と比較しても充実していると感じていますので、あとは全てのサブスペシャリティの領域で研究が進み、大学院生が誕生することが願いです。何とか私の退任までに全領域で充実した臨床研究と基礎研究ができるアカデミアにして、次世代にバトンタッチしたいと思っています。

以上の抱負を実現するためには毎回述べてきたことですが、教室員を増やすことが必須です。

令和元年に2年目研修医から8人が新入局した年は、外科系4科（第1・2外科、呼吸器外科、小児外科）の入局者総数より産婦人科の方が多く、それ以降、外科系4科は合同の医局説明会を開き、「お互い競り合わずとりあえず“外科総合プログラム”に入れることを優先し、産婦人科・整形外科に負けるな！」を合言葉に強力なプロモーションを始められました。年々希望者の少なくなる外科系志望研修医の取り合いをしても仕方ないと思うのですが、その後、我々の勧誘はかなり厳しいものとなって今日に至っています。マンパワーは何物にも代えられない教室の原動力です。私は今の時代に産婦人科を選ぶこと、そして当教室を選ぶことは、やりがいのある間違いのない選択だと思っていますので、従来同様、心から学生・研修医を勧誘し続けますが、彼らが一番知りたいのは年代の近い若い世代の産婦人科の声です。当教室の若い先生たちが本音で「産婦人科はいいよ！おいでよ！」と勧誘できるように、質・量ともにより充実した臨床・研究環境を提供していきたいと思います。また学外からの入局者はもちろん、教室見学者もコロナ禍のなか、激減してしまいました。学外・県外に“産婦人科に興味を持つご子弟やお知り合いがいる”との情報は、教室OBであられる同門の先生方からいただけることに期待するところ大です。見学に来ていただいたり、勧誘に出向くことはどんなに忙しくても厭いませんので、同門の皆様におかれましては引き続き、教室員増に向けてご支援ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。